第二回リレー小説「梅雨」白組三番手

天夜薄

　全校生徒に登校禁止が言い渡されるまでにそれほどの時間はかからなかった。

　私が七時きっかりに目を覚ましたら、丁度スマートフォンが震えだした。何だろう、一限に出ななきゃいけないのにとか、だるいなあ朝ご飯どうしようとか思っていた頭が、メールに書かれていた休講という言葉に俄に脳内麻薬で沸騰しそうになったのは言うまでもないことだ。

　けれどもその理由はと言えば、決して歓迎されるものではないことを、私は知っている。

　昨日通り魔に襲われた女性は、重傷らしい。意識が無く、白い布を顔に被せていたら死体と間違えてしまいかねないような状態だという。そういう被害が出たことで、学校側も相当事態を重く見たようだ。事態に（それが良い方向であるにせよ悪い方向であるにせよ）進展があるまでは、極力外に出ないことを生徒に通達した。学校側は警察と協力して出来るだけ早い事件の解決に尽力するっていうことらしいけど、それでどのくらい効果があるか分かったもんじゃない。少なくとも、この街がかなり危険な状況下にあることは確かだ。

　その少し後、今度は電話が掛かってきた。誰だろう、と思って見ると十和田さんだったので、快く出た。彼女特有のおっとりした声が私に妙な安堵を与える。

「あ、津理恵ちゃん、寝てた？」

「いや、学校からのメールで起きた所だよ」

　私はそう答える。正しくはないが、いつも一限に若干遅れてくる私が、余裕綽々で学校にたどり着けるこの時間に起きていると知られたら、このぐうたら振りが知れてしまうのではないかと、何となく危惧したためだ。

「そっか。それより大丈夫？　襲われたりしてない？」

「……どうして？」

「綾瀬君が」ああそうだった、十和田さんは綾瀬君とそれなりに仲は良かったんだっけ。「昨日津理恵ちゃんが帰りに通ってった道が、昨日通り魔があった場所の近くだったって言うから、心配してたんだよ」

「なんだ、そんなこと。大通りは通ってないから、平気平気」

　襲われた所は見たけど。喉まで出しかかったところで、酸素と窒素で押し込んだ。見てしまったことを言いたくないし、見たのに全くもって平然としてるのを指摘されるのも嫌だ。そして何より、見たことを聞かれるのが何より嫌だ。気持ち悪い。気色悪い。そうした形容を用いてしか、説明できない気がしていたから、どうしようもなく曖昧になってしまう。それはお互いに取って、あまり良くない。

「良かった」

　その言葉には一点の曇りも無い。十和田さんは一旦耳から電話を話して、隣にいる某かに私の無事を伝えていた。軽さを帯びた低い声。私が昨日右から左に受け流してことなきを得た言葉が、まともに私の耳を突く。何で綾瀬が十和田さんと一緒にいるのか、あまり考えたくはない。

「それでね」

　彼女は楽しそうな声で話を続けた。この街には恐ろしい通り魔がいるというのに安穏としたものだ、と思う。そんなの私だけで良いのに、とも。

「津理恵ちゃん、昨日鳥取砂丘に行きたいって話してたじゃない？　そのこと綾瀬君に言ったら、行きたいっていうからさ、今から皆で行かない？」

「え、今から？」

　流石に動揺する。どうして、どうしてそうなったというんだろう。そしてそれを曲がりなりにも許容しているこの人たちは、何なんだろう。ぐるぐる、思考をない交ぜにしている中に、彼女は容赦なく情報を流し込んでくる。

「うん、私と綾瀬君と津理恵ちゃんと、あと佐原先輩が行きたいって」

「でも、今からって言ったって、新幹線乗れるかも分からないし、ホテルだって取れないでしょ？　お金だってすごい掛かるし、それにいつまで学校が休みかも分かんないじゃん」

「佐原さんが車出してくれるって。ガソリン代を皆で割り勘にしてけばいいよ。車あればあっちで色々回れるし、私も免許はあるしね」

「ホテルは？」

「車中泊って知ってる？　お金も多少は安くなるよ」

　十和田さんがそこまでワイルドだとは知らなかった。知りたくなかった。

「でも、学校は……」

「どうせしばらく捕まらないよ。それに始まったって関係ないよ。怖いから出ませんでしたって言っとけば、きっと皆分かってくれるでしょ」

「……それで納得してるの？」

「そうじゃなきゃ、皆行くって言わないよ」

　呆然として、溜め息さえ出なかった。ああ言えばこう言う。全て私に話を伝える前にお膳立てされていた。それは私を取り込む包囲網のようで、あなたが行きたいって言ったんだから、と理由づけて逃さないようにしているのだ。あれだけ渇いたところに行きたいと言った私より、今となっては彼女たちの方が楽しんでいる。いや私といえばその目的は楽しむという所ではなかったはずなのに。彼女たちのペースに乗せられている。

　もう私は軽口で、そうだ、鳥取砂丘に行こう、なんてことを言えなくなってしまった。

＊

　実の所、正直がっかりした。

　砂丘にも雨は降る。そうなると地面が砂だろうとコンクリートでもお構いなしに、純粋な空気というものが剥奪されていく。それが私の体験しているもので、私以外の誰も実感していないことだろう。雨の降った砂丘は存外歩きやすくて、けれども砂丘の風景とか砂丘からの眺望が、晴天時に比べて決して見劣りするものではないから、観光としては良好の部類に入るのだろう。私もそれは実感している。

「うお、すげえ！」

　砂丘を上り切った綾瀬が叫ぶように言う。強い風に帽子が飛ばないように抑えていた私はまともにそちらを見はしなかったが、綾瀬と十和田さんが一緒になって騒いでいるのは分かる。

「元気だねえ、最近の若い子は」

「佐原先輩だって、たった二つ違うだけじゃないですか」

「たった、ね。三隈さんが高校生の子を若いって、思うみたいなものだよ」

「そういえば、もう随分前のことのような気がしますもんね」

　制服を着ていた高校生時代。卒業式を切欠に切り離された過去と成り果てた時代を、私も生きていたんだろう。もう記憶の片隅にしかないのだけれど。

　時が過ぎるのは案外早くて、その早さは無慈悲で、無慈悲が途切れることは無かった。卒業という出来事からそう長い時間は経っていないはずなのに、いつの間にか私は高校生というものが酷く昔のことだという感覚になっている。それは多分長い時間が経ったからではなくて、意識しなくなったからだと思う。だって私は卒業式と一ヶ月しか変わらないはずの入学式をもう懐かしく思っているし、鳥取砂丘に来ている今、学校の近くで起きた通り魔事件を目撃したその瞬間から、結構な時間が経ってしまったようにも感じている。鳥取には学校の近くにいたような、ミミズのような通り魔なんていないって、分かってるから。

「……三隈さんは、雨は嫌いなの」

「雨はそこまででは……今の雨は梅雨そのものですから、嫌いですが」

「それもそうだね、ジメジメしてる」

　佐原が苦笑して言ったとき、十和田さんが元気にこちらに手を振って、呼んでいるのが聞こえた。風で動きの重い身体を何とか持ち上げて、私と佐原はようやく砂丘の頂辺までたどり着く。普段の運動が自転車のみの私には少々堪えた。

「少し休んだら下りて、夕日見に行きませんか？」

　十和田さんが座り込んだ佐原に提案する。クタクタだ、と言いたがっているのが態度にも表情にも現れているが、佐原は無理矢理笑顔を取り繕ってみせる。

「いや、先に車に戻るよ。ガソリンが減ってたかもしれないから、ちょっと確認したくてね」

「そうですか……じゃあ津理恵ちゃんは？」

　言葉の矛先を、十和田さんはこちらに向ける。私は考える振りをして、私に向けられる三つの視線を吟味する。十和田さん。疑う必要も無く純粋だ。綾瀬。論外。私が行くことを期待しているのは分かるが、行ったらちょっかいでは済まされないことをされそうな気配がビンビンしている。あくまで気配だというに留めておくことにしよう。佐原、はと言うと。佐原は佐原で別の期待をこちらに向けているように感じる。綾瀬と違って、こちらには一考の余地がある。

　さて、どうしたものか。

＊

「やっぱり、ガソリン半分残ってるじゃないですか」

　車に入って開口一番、私は指摘した。日が落ち始め、やや暗くなってきた中、彼は最後部の座席を畳んでしまいながらスペースを空ける。

「何か理由付けなきゃ、車戻れないような感じだったからさ」

「私みたいに『疲れた』でいいじゃないですか」

「引率する先輩として、それはあんまりじゃないかな」

　ほら空いたよ。佐原はそう言って私を呼ぶ。私はそれに従って空いたスペースに腰掛けて、佐原と相対する。その間に置かれるカードの束。

「ゲームする元気はあるんですね」

「疲れてるんならやめようか」

「いえ、お願いします」

　笑いながら言って、山札からカードを引く。さてどうしたものか。私はとりあえず守備表示でカードをセットするだけにしておく。

「三隈さんって結構突っ慳貪なのに、考え方は結構守備的だよね」

「女の子には危険がいっぱいですからね。この前の通り魔みたいに」

「それもそうだ」

　佐原はカードを引いて、すぐさま守備表示でカードを伏せる。それ以外に二枚、カードを伏せる。

「どうぞ」

　促されるまま、私はカードを引いた。あまり良いカードではない。

「うーむ」

　悩んだのも束の間、もう一枚守備表示にカードをセットして、終える。頭を振り絞ってもそうそう良い答えは出そうに無い。

「通り魔、捕まると良いね。サークルの女の子が襲われないかと思うとヒヤヒヤするよ」

「うちのサークルの男の人、皆ヒョロイですからね。通り魔と会ったら、壁になる間もなくノックアウトされそう」

「ははは」

　渇いた笑いが車内に響く。彼は場の状態を維持したまま、私にターンを回す。

「佐原先輩は、相変わらず良く分からないことをしますね」

「いやいや、私の中では結構定番の戦法なんだけど」

　互いに驚いた顔をしたが、多分理由は全く違う。

　はてさて、定番の戦法というからには定石からは外れていないはずだ。ならば、うむ。カードを引きながら思考を巡らせる。あれがこれで、これがどうで、だからああそうなのか、ならば。しばらくして、私は場からモンスターを一体取り除くと、代わりに別のモンスターを召喚する。今度は攻撃表示。特攻。

「定番というからには失望させないでくださいよ」

　私はちょっとだけ格好付けて佐原を煽ってみせた。佐原は調子に乗ったみたいに不敵に笑った。

「ふふふ、見せてやろう、私の切り札！」

　佐原はやや大袈裟にカードをめくった。叩き付けられてピシッと鋭い音がなる。少し遅れて私はカードに焦点を会わせる。スーツを着た男とも女とも取れない人間を象った人形の絵。効果は何だったけか。視線を移そうとする私の目は、その端に映った某かのために剥がすことが出来なかった。それは明らかにカードに描かれたものとは違っている。

　血、紛れもなく血だ。私はこれほど狂気を煽るような絵の具の色を知らない。カードの絵を上書きしたその血液は強烈に映る。何で血液が、という前に、私の思考はこの血液が何処から至ったのかについて考察を始めた。

　佐原により先ほどまで伏せられたこのカードに、血液が付着する可能性は二つ。佐原の指が切れていたか、めくったと同時にどこからか飛んできて付着したか。しかし指についていたならこんなに滑らかに広がらない。べちゃっと、潰れたようになっているはずだ。ならば、何処から。

　視線を上げる。印象的だったのは佐原の苦悶の表情だ。痛みに打震えるとか、恐怖に打震えるとか、そういう感じ。時折口から途切れ途切れに漏れる声がそれを助長する。

　佐原先輩。どうしたんですか。問おうとした言葉は思うように出てこなかった。目が行ってしまったからだ。認識してしまったからだ。佐原の肩がまるでソフトクリームを、スプーンでひょいとすくったみたいに綺麗に削り取られているのを。僅かに残った骨で辛うじて腕が繋がっているのを。そしてカードに付着した血液が、彼の脇に血溜まりを形成する際に、飛び散ったものであると理解した。

　ふむ、と一言で片付けるにはあまりに常軌を逸している。

　言葉を失っている私の視界に、別の事物が転がり込んできた。否、ずっと佐原の背後にいたのを私が気付かなかっただけだ。気付きたくなかっただけだ。意識しないようにしていただけだ。ここに彼の肩を削っていた何かがいることを、認めたくはなかったから。そしてここにいるわけが無いと頑に信じ込んでいたから。

　それは確かに私が昨日見かけた通り魔で、多分、いややはり、みみずと形容するのが一番もっともらしい。